

「子どもたちの手づくりあげた幼年会」

I はじめに

この紀要は、小学校社会科副読本「わたしたちの座間」に掲載されている、「子どもたちの手づくりあげた幼年会」の指導用の資料としてまとめたものです。

幼年会は、鈴木利貞が、明治三十三年（1900年）に河原宿地区に創始し、明治から大正を経て終戦をむかえる昭和二十年代までの長期に渡って、座間の各地域に展開された活動です。

自分達の地域や生活は自分達の力で良くしていこうと活動した子ども達の姿からは、地域の連携が弱まり、「自分さえ良ければ」といった風潮になりがちな現代において、わたしたちが学ぶべきものは多いと考えます。

当時の手がかりとなるものは座間小学校のいずみ文庫や種々の文献等に残されていますが、子ども達が調べていくには難しいものも多いですが、この紀要が授業作りの参考になれば幸いです。

II 単元について

4年生の社会では、自分たちのまちのくらしをよりよくするための社会的な仕組みや施設について学び、多くの人々の努力や工夫・協力によって現在の生活が支えられていることを理解していく。

幼年会は、鈴木利貞が、明治三十三年（1900年）に河原宿地区に創始し、明治から大正を経て終戦をむかえる昭和二十年代まで、座間の各地域に展開された活動である。

「いじわるをしない」「年下の子は年上の子を敬い、年上の子は年下の子をかわいがる」といった誓いを立て、助け合い・思いやりの精神を大切に、自分達の地域や生活は自分達の力で良くしていこうと活動した子ども達と、その活動を温かくサポートした教師や地域の大人達。やがて幼年会で育った子ども達は大人になり、村（町）づくりの中心的役割を担うようになっていく。

この、戦後の座間を作る礎ともなった活動から、地域の連携が弱まり、「自分さえ良ければ」といった風潮になりがちな現代において、わたしたちが学ぶべきものは多い。幼年会についての学習を通して、昔も今も変わらず、よりよい生活を求めて努力する人々の姿をとらえることができれば、と考える。

当時の手がかりとなるものは座間小学校のいずみ文庫や種々の文献等に残されている。子ども達が調べていくには難しいものも多いが、今の自分達の生活と対比させながら学習を進めさせていきたい。

Ⅲ 指導展開例

学校によって、体験や見学ができるものに違いがでてくるが、一例として以下のような指導展開を提案する。

1 単元目標

地域の暮らしをよくしていこうと努めた鈴木利貞と幼年会の子ども達の活動について調べたり考えたりできるようにする。さらに当時の、地域社会の発展を願う人々の思いや活動が今日につながっていることに気づき、地域社会の発展に関心をもつことができるようにする。

2 単元の評価規準

評価の観点	評価規準
関心・意欲・態度	鈴木利貞と幼年会の活動について関心を持ち、意欲的に調べ、追究している。
思考・判断・表現	当時の座間村の様子とあわせながら、また、現在の自分たちの生活と対比させながら、幼年会で活動していた子ども達の願いや努力について考え、話し合ったり発表したりと、目的に応じた方法で表現している。
技能	写真、年表、いずみ文庫に展示されている物などの資料を活用して、当時の生活の様子や幼年会の活動について調べている。
知識・理解	地域社会の発展に尽くした鈴木利貞や幼年会の子ども達の努力や工夫、苦心などが分かっている。

3 単元の指導と評価の計画（5時間扱い）

時間	ねらい・学習内容 (◇ねらい ◆学習内容)	関	思	技	知	評価規準・(評価方法)
1	◇100年くらい前の座間村の様子について考え、幼年会の活動について学んでいこうとする意欲を持つ。 ◆写真を見て、当時の子ども達の生活について話し合う。 ◆いずみ文庫を見学し、当時の生活について関心を持つ。	○				・当時の生活についての話し合いに意欲的に取り組んでいるか 【関】(発言)(ワークシート)

2	<p>◇幼年会のはじまりについて理解するとともに、幼年会で活動する子ども達の願いを考えることができる。</p> <p>◆パワーポイント資料を見て、幼年会がどうして始まったのかを考える。</p> <p>◆幼年会の約束がつけられた背景について考える。</p>		○		○	<ul style="list-style-type: none"> ・鈴木利貞と子ども達がどのようにして幼年会をはじめ、活動を広げていったのかを理解しているか 【知】(ワークシート) ・幼年会の約束を話し合った子ども達が、どのような願いを持っていたかについて考えているか 【思】(発言)(ワークシート)
3	<p>◇幼年会の活動の基本となる3つの柱について理解するとともに、活動を広げていく子ども達の願いを考えることができる。</p> <p>◆パワーポイント資料見て、幼年会の活動の3つの柱について考える。</p> <p>◆幼年会の活動の中で興味を持ったものについて、副読本を参考に調べ、わかったことを発表する。</p>		○	○		<ul style="list-style-type: none"> ・幼年会の活動について資料を活用して調べているか 【技】(ワークシート) ・調べてわかったことを発表したり、ワークシートにわかりやすく表現したりしているか 【思】(ワークシート)
4	<p>◇幼年会の活動や、子ども達の願いと、現在の自分達の生活とを対比させながら、自分達の暮らしをよくしていくために自分達にできることは何かを考えることができる。</p> <p>◆幼年会の活動のよいところを考える。</p> <p>◆自分達の暮らしをよくしていくために自分たちにできることについて話し合う。</p>	○	○			<ul style="list-style-type: none"> ・当時と現在を対比させながら、自分達の暮らしをよくしていくためにできることを考えているか。 【思】(ワークシート)(発言) ・話し合いに意欲的に取り組んでいるか 【関】(発言)

5	<p>◇地域社会を大切にしていこうということについて考えることができる。</p> <p>◆パワーポイント資料を見て、幼年会のその後を知り、現在に受けつがれている願いや活動について考える。</p> <p>◆地域社会の一員として自分たちがしていきたいことについて話し合う。</p>	○	<p>・現在に受けつがれている願いや活動をもとに、地域社会の一員として自分たちがしていきたいことを考えているか。</p> <p>【思】(ワークシート)(発言)</p> <p>・幼年会についての学習を通して、学んだことや考えたことを発表したり、ワークシートにわかりやすく表現したりしているか</p> <p>【思】(ワークシート)(発言)</p>
---	--	---	---

4. 2時間目の展開例

(1) 本時の目標

幼年会のはじまりについて理解するとともに、幼年会で活動する子ども達の願いを考えることができる。

(2) 本時(2/5)の観点別3段階評価の判断基準

評価	思考・判断	知識・理解
<p>おおむね満足できる (B)</p>	<p>幼年会を自分たちの手でよくしていこうとする当時の子ども達の願いについて考えることができる。</p>	<p>近所の子も達のお兄さんのような存在だった鈴木利貞と、利貞を慕う子ども達が、幼年会を作り、広めていったことを理解できる。</p>

(3) 学習の展開 本時(2/5)

展開(時間)	学習活動と内容	教師の指導と留意点	評価場面及び手立て
<p>導入 (5分)</p>	<p style="border: 1px solid black; padding: 2px; text-align: center;">100年くらい前の座間はどんな様子だったか</p> <p>当時の座間村の様子について確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農家が多い ・大人は忙しい ・子どもも働いている ・貧しい 等 	<p>前時に見た写真や、いずみ文庫の展示品を思い出させながら考えさせる。</p>	

展開 (35分)	幼年会の約束はどうしてできたのだろう		【知】 幼年会のはじまりについてわかったことを発表している場面（発言） また、わかったことをワークシートに書いている場面（記述）
	パワーポイント資料を見る。	パワーポイントを使いながら、分かりやすく幼年会の始まりについて説明する。	
	ワークシートに、幼年会の始まりについてわかったことをまとめる。	わかったことを発言させながらまとめさせる。	【思】 幼年会の約束について、考えたことをワークシートにまとめる場面（記述） また、考えたことを発表する場面（発言）
	幼年会の約束がなぜできたのか考え、発表する。	約束がなぜ必要だったか、みんなが約束を決めるのはどんな時かを考えさせる。	
まとめ (5分)	今日の学習を振り返って感想を書く。	今日の授業の中で、今の自分たちにも大切だな、と思ったことを感想に入れるように声かけする。	

他の展開例としては、以下のようなものが考えられる。

- 3年生の時の「市の人々の暮らしの移り変わり」の学習と関連させて、昔使われていた道具や、当時の暮らしなどについて調べる。
- 副読本に掲載されている写真からわかる当時の様子について話し合う。
- 幼年会の約束や理想の社会と関連させて、今、自分達ならみんなが幸せに暮らせるように、どんなことを考えるか話し合う。
- 幼年会の子ども達のように、お話し会やお楽しみ会を自分達で開いてみる。

IV 幼年会と鈴木利貞 解説

ここでは幼年会についての学習を進める上で重要となるいくつかの事項についての解説をまとめた。必要に応じて子ども達に紹介するなどして活用していただきたい。

(1) およそ100年前の座間の様子

- ・ほとんどの家が農家。貧しい家も多かった。(当時の写真を見るとはだしの子どもが多い。)
- ・大人は忙しいため、子ども達はほったらかしになっていた。そのため、いじめや乱暴をしたり、人をからかったりといった野放図な子ども達も多かった。子どものころ体が弱かった鈴木利貞もいじめられがちであった。
- ・子どもも奉公に出たり家の手伝いをしたりするなど、働くのが当たり前だった。仕事のために学校に行けない子、行けても尋常小学校4年(高等科には進まない)までの子も少なくなかった。
- ・テレビ、ゲームなどの娯楽がなく、本を手に入れるのも難しかった。後に幼年会で本を購入するために会員一人当たり、月五厘ずつの積み立てを始める。初めて購入した本は、五銭~九銭のもの数冊ずつと、一冊二十銭(月五厘で四十ヶ月分)の『孫悟空』だった。

利貞は小学校時代、同級生と以下のような会話をしている。

「……このごろの座間学校は風紀がひどく乱れている。男の上級生は若い衆みたいだし、女はいわゆるオテンバで行儀がわるい。“コンナデハダメダ”が、一人や二人の力ではどうしようもない……」

ここでいう若い衆とは小学校卒業から二十歳くらいまでの若者の集団のこと。昼は父兄とともに農作業を行うごく普通の青年である。一人一人はなんの問題もない人々である。

しかし、彼らだけが集まるとその行動は一種の群集心理に支配されて、意外な方向へ脱線してしまっていた。

「道を通る人に悪口を浴びせ夜遊びに出て、たばこをのむ。中にはバクチや盗みを働くものもいた」ようである。

座間村の五つの部落(座間・座間入谷・新田宿・四ッ谷・栗原)は江戸時代以来、明治22年までそれぞれ独立した五つの村だった。幕府の施策によりお互いが反目するようにし向けられていた。そのため他の部落のものといえば喧嘩し、罵り合い、いじめ、憎しみ合うことが当たり前のこととされていた。

大人達のそのような姿を見て育ったので、理由もなくいじわるをしたり、からかったりするような粗暴な子どもも多かったようである。

なお、こうした光景は座間に特有なものではなく、この頃の農村ではいたるところで見られていたようである。

※授業でのポイント

「100年前の座間」と言われても、子ども達はイメージしにくい。副読本掲載の写真や、3年生の時の「市の人々の暮らしの移り変わり」の学習と関連させて当時の様子を考えさせていきたい。いずみ文庫の見学が難しい場合、昔使われていた道具などを手がかりにしてもよい。

農家で大人は忙しく、なかなか子ども達に構っていられなかったこと。学校にお弁当を持って行けなかったり、そもそも働きに出るため学校に行けなかったりするくらい貧しい人々も少なくなかったということ。娯楽がほとんどなかったこと等、これから幼年会を学んでいく上で大切な背景となるところであるが、あくまで「座間市の昔のことを調べよう」という3年生の学習とはねらいが違うので、いくつか絞られた手がかりを元に当時の様子が押さえられればと考える。

(2) 幼年会の始まり

①鈴木利貞（すずきとしさだ）の生い立ち

- ・1882年（明治15年）、座間村河原宿（現座間市座間二丁目）に誕生。
- ・家は代々農業を営んでいて、多少の田畑や山林を持つ自作農であった。
- ・幼いころから体が弱かった。
- ・登下校の途中などでガキ大将にいじめられるのがこわく、登校を渋ることもあった。
- ・読書が好きで、友達や学校の先生に本を借りて読んでいた。8才には、『源平盛衰記』を読破したという。
- ・座間小学校の高等科を卒業後、横浜の県立第一中学（現希望ヶ丘高校）二年生の編入試験に合格し、入学。夜間まで勉学につとめていた。
- ・1899年（明治32年）中学三年生のとき、寄宿舎での栄養バランスに欠けた食事のため脚気を患い、体調が回復せず退学。家に帰らざるを得なくなってしまった。

「農家を営む者が本なんか読んで何になる」と言われてしまう時代である。（今で言えば「マンガなんか読んでないで勉強しなさい」といったところか）利貞の中学への進学には利貞の父の強い反対もあったが、教師や母に父を説得してもらってまで進学した利貞にとって、病気のための途中退学は大きな挫折であった。

しかし、小さいころからたくさん本を読み、そこから多くのことを学んだこと。不当にいじめられ、つらい思いをしたこと。学生時代に座間を離れ、寄宿舎生活を送ることで、自分をとりまく農村社会を広い立場から見直すことができたこと……。これらの経験が利貞の、教育者としての強い理念を形作っていったものと考えられる。

②夜のお話し会が始まる

- ・利貞が帰郷し、病気を治しながら家で読書をしたり、畑で農作業を手伝っていたりしていると、近所の子ども達が集まってくるようになる。
- ・集まってくる子ども達に利貞がいろいろな話を聞かせてやると、「おもしろい」と評判になる。
- ・少し大きい子ども達のために、利貞は夜に話を聞かせる。

- ・やがて行事化し、利貞の家で主に農閑期の土曜日の夜にお話し会が開催されるようになる。
- ・この夜のお話し会が評判となり、利貞の家のある河原宿地区だけでなく、座間村全域の地区から多くの子ども達が集まってくるようになった。

もともと子ども好きであった利貞は、集まってくる子ども達に草むしりなどをしながらおもしろい話を聞かせてやった。いじめやけんかが多く、野放しの野生児のような毎日を過ごす子ども達に、「どうにかしてもっと人間らしい生活をさせてやりたい」と考えていた利貞は、子ども達に話をせがまれると、「けんかをしないで仲良くするなら」とか、「小さい子はかわいがるんだよ」などと言いながら話をしてあげた。子ども達はけんかをすると話をしてもらえないのでつついけんかがなくなり仲良くするようになっていった。

大人達は仕事に追われ誰も構ってくれない中、年の近い利貞は、子ども達にとってお兄さんのような存在だった。また、利貞と一緒にいれば、ガキ大将にいじめられる心配もない。友達とのけんかも公平に裁いてくれる。その上おもしろい話を聞かせてくれるという、子ども達にとってとても居心地のよい場所になっていった。

少し大きい子ども達は学校から帰るとすぐに、農作業や家の手伝いなどをしなければならなかった。幼い子ども達から利貞のことを聞いて、自分達もおもしろい話を聞きたい、と求める彼らのために、利貞は夜に仕事を終えた近所の子ども達を自宅に呼び、童話や昔話等の本を読んだり、お話をして聞かせたりするようになった。

現代のようにテレビもゲームもマンガもない時代である。本も高価でなかなか手に入らない中、三国志の英雄の話や一寸法師の物語などに子ども達は夢中になったことだろう。

やがて子ども達は自然とこうした集まりのことを「幼年会」と呼ぶようになった。利貞の日記にも、

「(明治34年) 1月1日 幼年会員を集めておとぎばなしをしたり」

「1月6日 ……近所の幼年会員集まりたるゆえ、西遊記の一節を話したり。

子どもらへの話の材料とて山本君より借りて来たるなり」

などと、「幼年会」という言葉が出てくるようになる。

なお、幼年会の起源については、後年(昭和12年)発行される幼年会報『さざれ石』の中で利貞が以下のように書いている。

「今の会員諸君の知っておられない昔話をして見ますと、座間に幼年会が出来たのは明治三十三年で、其の年の会員は自分で『幼年会』と名をつけて呼んだのであります……」

③幼年会が座間の各地にできる

- ・前述のようにして最初にできたのが「河原宿幼年会」である。
- ・利貞は高等科の生徒達に「どうか君たちも自分の近所の者たちで、この様な会を作ってもらいたい」と呼びかけた。(明治34年1月)
- ・そんな折、新田宿に発生した大火事が飛び火して、河原宿の利貞の家も全焼してしまった。そのため、それまで利貞の家で行っていた幼年会の集まりも中断した。(明治34年2月)

- ・そのため、入谷、下宿、新田宿、栗原と、各地域に独立した幼年会ができ、利貞はそこへも出かけて話をするようになった。

このころになると、利貞の呼びかけで、利貞の話聞くだけでなく、子ども達の中にも話をする者が出てきている。また、各地域に幼年会ができたことで、それまで遠くて参加できなかった小さな子ども達も参加するようになった。この夜のお話し会は談話会とも呼ばれた。

④幼年会の約束と理想の社会

- ・小さいころからいじめられがちだった利貞は、子ども達に、折にふれ「みんなが仲良くすることが大切だと言ってきかせていた。
- ・けんかをする楽しみにしているおもしろい話が聞けないから……。初めはそんな理由だったかもしれないが、実際に仲良く過ごしているうちに子ども達は利貞の言う「思いやり」や「仲良く」ということの大切さを理解し始める。
- ・そうして子ども達は「自分達の河原宿の子ども達だけでも弱い者をいじめることをやめよう」と考え、話し合い、柿の木の下やぐらの上で太鼓をたたいて遊びながら、「これからは皆で仲良くして……」ときめた。この「柿の木の下誓い」が後に河原宿幼年会規則の中の幼年会員が守るべき約束となっていた。

<幼年会の約束> (河原宿幼年会規則より)

- 一、意地悪き事をせざる事。
- 二、他人に対して悪口をいわざること。
- 三、喧嘩せざること。
- 四、学校にて教えを受けたる事は、郷党の間においても必ず守るべきこと。
- 五、年少者は年長者を敬うべきこと。
- 六、年長者は年少者を労りいつくしむべきこと。

- ・最初の幼年会員だった少年達は、小学校卒業後も利貞の開く夜学に通って勉強を続けたり、皆でいろいろなことについて話し合ったりしていた。その中の一人、渡辺大吉少年（14歳）が日記の中で次のように書いている。

今晚鈴木さんのところにいき、理想の河原宿ということについて皆で話し合った。今後河原宿の者がみんなをよくかせぎ、貯金をして千円も二千円も貯めてから、何百年かの後には大神様（部落中央の小さな社）の近所を公園のようになし、周りに垣を作り、中央には二階も三階もある大きな家を作り、河原宿の者は誰でもそこへ行って遊びたければ自由に遊ぶ。またあらゆる書物を積んでおき、自由に読む。子供が学校へ行くには学用品をはじめ、服装なども一様になし、遊ぶにはテニスの道具など幾組も備えつけ、オルガンも二十台も三十台もそなえつけて自由に弾かせる。

（中略）貯金の金にて商船をたくさん作り、河原宿の船はどこの港にいても碇泊しているようにし、外国貿易もし、得た金は貯金し、愉快に世を送るようにしたい。そして医学博士くらいの者を雇い、みな身体検査をして体の弱い者には卵や牛乳などを自由にくれる。河原宿の者は丈夫である。子供は学校でもよく出来、行いも正

しいと言われる。大きい者は小さい者のめんどろをよく見、小さい者は大きい者の言うことをよく聞く、というようにし、この河原宿を一大家族としたらよからん、などと話し合いぬ。

※授業でのポイント

本単元は利貞の生涯についてを学ぶことがねらいではないが、幼年会について学ぶ上で、利貞がどのような人物であったか、利貞と子ども達がどのようにして関わり合いを深めていったのかを理解しておく必要がある。

副読本本文だけで読み取っていくのは難しい部分でもあるので、パワーポイント資料を活用するとよい。

(3) 幼年会の活動

- ・幼年会の活動は大きく3つの柱に分けられる。

「資金を集めるための活動」

タニシとり イナゴとり 米づくり 縄ない 麻糸つなぎ 新聞配達 等

「地域の役に立つ活動」

神社や道路の清掃

道に落ちている危険な物を入れる箱（公德箱と呼ばれた）や、げたやぞうりの修理に必要な布やひもを入れておく缶の設置 等

「みんなで楽しむ活動」

夜のお話し会 遠足 学芸会 等

夜のお話し会で読書の楽しさを知った子ども達は、はじめは利貞から借りて読んでいたが、しだいに、自分達も本を買いたい、と思うようになった。しかし当時本はとても高価で親が買ってくれることは期待できなかった。そこで会員から会費を集め、積み立てて、本を購入し、皆で回覧して楽しんだ。

こうした経験から、自分達の活動に必要なお金は自分達で作ろうという発想につながったと考えられる。本の代金やお楽しみ会の時のおかし代、遠足の船賃、さらには自分達が自由に集まれる集会所の建設のため、皆で協力して働こうと話し合い、資金を集めるための活動が始まった。

しかし、ただお金のための労働というだけではなく、例えばタニシとりは毎年春の恒例行事として、子ども達の楽しみでもあったようだ。また、タニシの売り上げの一部は、借りた荷車や大釜のお礼に持っていったり、タニシを売る値段を、「村のお店より高価では悪いし、かといってあまり安くするとお店が困るだろう」と、子どもなりの思案をはたらかせたりして、社会や経済の勉強にもなっていた。

自分達の暮らしは自分達で良くしていこうと、積極的に地域活動にも取り組む子ども達の姿に、地域の大人達も温かくサポートしてくれた。幼年会がタニシとりに行くころになると、近所のおうちは貧しい中でもタニシを買うためのお金を用意し

て待っていてくれた。公德箱がいっぱいになるころには誰かが捨ててくれていたり、げたやぞうりの鼻緒が切れたときに使うぼろきれや麻ひもなども使われてなくなる頃にはまた誰かが入れておいてくれたりもした。こうして幼年会の活動は地域の生活にとけ込み、長期に渡って続いていった。

※授業でのポイント

幼年会の活動内容は大人が決めたものではなく、子ども達が自分達で考えたり話し合ったりしていった結果であること。企画や準備も含めて子ども達の手で行われたこと。(地域の大人達も温かくサポートしているが)等が今の子ども会と大きく違う点である。

ここでは、表面的に「どんな活動をしていたのか」を学ぶのではなく、「自分達の暮らしは自分達で良くしていこう」「自分達が幸せになるには地域みんなが幸せにならなければいけない」と考え、実行していった当時の子ども達の思いや願いにせまっていきたい。

誰かが何かをしてくれるのを受けて、楽しいとかつまらないとか言うことの多い現在の子供達が、時代背景が違っても、「自分達(みんな)のために、自分達でできること」を考え、実行していくことの大切さに気付くことができれば、と思う。

(4) 幼年会と座間小学校

①座間小学校に組長制度を導入

- ・1902年(明治35年)、19才の利貞は、井上連作校長に乞われて代用教員として座間小学校に勤め始める。(その翌年、利貞は尋常科正教員と、高等科准教員の免許を取得した)
- ・利貞は、幼年会での経験を生かし、「子ども達こそが将来理想の座間村を創る人材だ」と、その実現に向け、工夫した教育実践を行っていった。
- ・その頃、隣近所の子供達が誘い合わせて登校する、という形で集団登校が自然発生的に行われていた。
- ・やがて一部の地区の子供達が「通学生の心得」を作成したり、「通学日誌」を記したりするようになると、すぐに他の地区にも広まっていった。
- ・このような子供達の行いから、リーダーが育つことの重要性に着目した利貞達座間小学校の教師は、1908年(明治41年)子供達の自治を育てるため、「組長制度」を導入した。組長制度は、学級の組長、登校班の組長をリーダーとして育成し、これらの組長がリーダーシップを持って児童生徒を指導していく体制である。

幼年会活動や利貞の教えの影響を受け、すでに年長者が年少者を労わるという心が育っていた子供達だったので、自然と「上級生は下級生のめんどろをみよう」「下級生は上級生の指図にしたがい、けんかやほしたくないことをしないように」などと申し合わせるようになっていく。こうして「通学生の心得」が作られた。

やがて登校班のリーダーは、「通学日誌」を記すようになる。ここに書かれたことが地区担当の先生に伝えられ、善い行いが皆の前でほめられたり、悪い行いはそつと注意されたりして、子供達の励みになっていった。

組長制度のもと行われる組長会議は、今でいう登校班の班長会議にあたるが、このように、上からの制度の押し付けではなく、子ども達の内面からの変化を大切にしながら行われていった。

②座間村幼年会設立

- ・座間小学校の11の通学区域全てに幼年会を設立した。
(上宿幼年会、中宿幼年会、下宿第二部幼年会※、河原宿第二部幼年会※、中河原幼年会、新田宿幼年会、四ッ谷幼年会、鈴鹿長宿幼年会、皆原幼年会、星の谷幼年会、栗原幼年会)
※第二部幼年会・・・下宿地区も河原宿地区も今回の設立以前から組織されており、今回の設立にあたって座間小に通学する児童生徒だけで構成した会が第二部幼年会とした。第一部幼年会は卒業生で構成されている会である。
- ・11地区の幼年会を村全体で組織・統一し「座間村幼年会」とした。
- ・幼年会活動が、学校教育の一環として座間小学校に正式に導入された。

かねてから利貞は、「幼年会を一部指導者と少年達だけの集まりにしておいたのでは不十分だ。よい子ども達を育てるには、社会（この場合は村）全体の協力が必要だ。それにはまず、幼年会を大人達から、社会全体から認められるようにしなければならぬ」と考えていた。そこでまず、井上連作校長の支援と同僚教員の協力によって組長制度を導入。さらに児童生徒の自治的能力の向上を目指し、座間小学校全地域に漏れなく幼年会を設立することに成功した。

1913年（大正2年）2月11日、11の幼年会が座間小学校に集まり、幼年会大会を開催した。この大会で、11の幼年会は「座間村幼年会」として統一した組織となった。また、同年3月25日には座間小学校の教育の一環として正式に導入され、以後、座間小学校の重要な教育の要として活動するのである。幼年会の活動舞台は、主に自分達の住む地域であった。そのため、教師は学級の担任の他、主に自分が住んでいる地区の幼年会担当となり、相談役として活動をサポートしていった。

③倶楽部を建設する

- ・こうして座間村幼年会は地域ごとに活発な活動を展開していく。
- ・1916年（大正5年）、青年会の協力により、最初の倶楽部（集会所）、「皆原幼年倶楽部・青年倶楽部」ができる。
- ・その後、他の地域でも次々と倶楽部が建設されていった。
- ・村役場からは一銭の援助も受けず、全て地域の人々の力で建設・運営された。

幼年会が始まったころよりの、「自分達の自由に集まれる場所が欲しい」が、という願いがついにかなうこととなる。

1905年（明治38年）の鈴木直寿（利貞の末弟）の日記には以下のように記してある。

「・・・夜は幼年会の夜学。集まった者は高等科一年以上十数人。・・・終って、

以後河原宿の卒業生の夜学をいかにすべきかの問題となる。以前から言っていたように田圃を耕作しようか。田さえあればたやすいことだ。米年二、三俵とれる田を作って、米二俵をもうけ、こうして二、三年すれば三十円貯金が出る。その金で二間三間の家は容易に買えるだろう。それから二年、三年と続けられれば学校のような机も出来、勉強しやすくなる。……」

当時農家の物置を夜学の場所としていた彼ら初期の幼年会メンバーがこうして始めた米作りは、実際にはたやすい、とはいかず、苦心を重ねるわけだが、こうした活動や思いは後輩に受け継がれ、また、彼ら自身も先輩として積極的に幼年会のサポートをしていった。

倶楽部の入り口の左右には二つの看板、「青年倶楽部」と「幼年倶楽部」がかかげられた。大人の会合にも使われたが、青年や子ども達の自由に使える場所となり、雨の日には子ども達の遊び場にもなった。

④第一回少年団ジャンボリー大会（ボーイスカウト全国大会）への参加

- ・ 1923年（大正11年）に東京で開催される。
- ・ 当時少年団と呼べる団体が全国にもほとんどなかった中、すでに長年に渡って活動してきた実績がある少年団体として幼年会に注目が集まり、神奈川県代表として座間村幼年会が参加することになった。
- ・ そこで小学5年生～高等科2年生の男子で「座間村少年団」が結成され、全国大会に参加した。

利貞は、「幼年会の名で参加したい」、「それまで一緒に活動してきた女子の参加も認めて欲しい」と大会事務局に訴えたが認められなかった。せめて幼年会員みんなの思いを込めて、急遽作成した幼年会の旗を持って行進することを認めてもらおうとしたがこれも認められなかった。そこで利貞は幼年会の旗を、チョッキの下に、腹巻きのように巻きつけて開会式の列に加わった。

幼年会が始まったころより、男女が協力して活動していくことを大切にしてきた利貞や幼年会であったが、男女が一緒に何かをする、ということはまだまだ受け入れられない時代であった。

幼年会は、この時より「座間村幼年会」と「座間村少年団」という二つの組織が混在する「一心二体」という形がしばらく続く。

※授業でのポイント

この座間小学校の教育に取り込まれた幼年会活動の詳細を授業で扱う必要はない。ただ、子ども達が自然に登校班を始め、上級生として下級生の面倒をみていこうと、「通学生的心得」を作成したり、「通学日誌」を記したりしていくところには着目し、今の自分達と比較させていきたい。

(5) 幼年会のその後

①利貞、厚木中学へ転任

- ・ 利貞は、1923年（大正12年）に座間小を退職し、1924年（大正13年）か

ら県立厚木中学校（現厚木高校）に勤務した。（利貞42才）

関東大震災の影響で中学の教員が不足している中、要請を受け、利貞は座間小学校を去る決意をする。利貞は厚木中学校でも子ども達の内面の育ちを大切にする教育を実践していくとともに、異動後も幼年会の活動を支援し続けていった。

なお、この後1927年（昭和2年）、利貞は「少年教育の功」により県知事の表彰を受けた。

②少年団と幼年会の統合

- ・利貞の厚木中学校での教え子、赤井基が、座間小学校教員として赴任してくる。当時幼年会の活動がマンネリ気味で停滞していたことと、「一心二体」の不明確さを感じた赤井が幼年会の改革を進め、1937年（昭和12年）、少年団と幼年会を統一して「座間幼年会」と改称した。
- ・こうした改革の中で組長を班長とし、新たに副班長を設けた。また、会員や学校・地域の連帯を深める目的で機関誌『さざれ石』を発行した。

④利貞の死と戦争の時代へ

- ・1938年（昭和13年）、勤務していた厚木中学校を気分が悪いと早退した利貞は学校近くの坂で倒れ、4日間ほど昏睡状態となり、7月9日、この世を去った。享年満55才であった。
- ・幼年会の改革に取り組み成功した赤井基は1940年（昭和15年）に横浜市瀬谷小に転任、赤井とともに幼年会の建て直しに尽くした教師の多くもその前後、異動で座間小を去り、幼年会の指導者が不在の状況となってしまった。
- ・1937年（昭和12年）陸軍士官学校が座間に移転。1941年（昭和16年）には近隣町村が相模原町として合併。同年太平洋戦争勃発。幼年会を地域で支える青年達も出征し、幼年会のリーダーとなる高等科の生徒も勤労働員のため幼年会活動に携われなくなった。こうした中で幼年会活動を維持していくことが難しくなり衰退。終焉を迎えることになった。

⑤終戦後の座間

- ・戦後の混乱の中、幼年会で育った者や厚木中学校で利貞の教えを受けた者達が立ち上がり、1946年（昭和21年）「座間青年同志会」を発足。以下のような事業を展開した。

「座間文庫の運営」

言わば小型図書館。会員やその父兄から書物を提供してもらい、子ども達や一般の人々にも貸し出した。

「英語の講習会」

会員の中の大学生や大学卒業生が講師となり、無料で教えた。

「スポーツ振興」

バレーボール大会や野球大会を開催。また、ピンポンなどは会合の前後の余暇を利用して、居合わせた者が自由に組んで気軽に楽しんだ。

他にも、演芸の会を開催し、収益金を町へ寄付したり、レコードコンサートを開いたりした。

- ・相模原町から分離独立する運動に青年団も参加。1948年（昭和23年）相模原町から分町した。
- ・1954年（昭和29年）青年団の熱意ある行動に町も動かされ、県内で一番早く「座間公民館」を建設した。
- ・座間町の各地に「子供会」が設立される。

敗戦の年の暮れには40名ほどの若者が集まって、「今後の日本を、少なくとも自分達の住む座間町をどうしようか」という話し合いが始まる。青年同志会に参加したメンバーの多くは、幼少期に幼年会活動を経験し、さらには厚木中学校で利貞の教えを受けた者であった。

メンバーの一青年の文章が残されている。

「……米軍進駐以来、日に日に悪化していく世相の無秩序、無道徳ぶり、これにともなう青年たちの空虚な姿に慨然としたのです。一国元気の源泉たるべき青年層が、こんな具合でよいのだろうか。何とかよい方法はないものかと考えました。幸いに敗戦の年も暮れようとする十二月、郷土の先輩より、我々の郷土だけでも我々青年の手で何とかしようではないか、と相談され、私として、日本の青年としての働き甲斐を痛感、微力をもかえりみず」

こうして始まった青年同志会の活動理念は、やがて再建された「座間青年団」へと受け継がれていった。

※授業でのポイント

地域を舞台に熱心に活動が続けられてきた幼年会であったが、戦争前後の混乱の中で衰退し、終焉を迎えることとなってしまった。

しかし、「自分達の暮らしは自分達の手でよくしていこう」という思いから青年同志会や青年団が活動を展開。文化活動の拠点として人々が公民館建設を願ったのも、幼年倶楽部・青年倶楽部の経験があるからであり、新たに設立された子供会では、幼年会経験者の多くが指導者になっていった。

このようにして、幼年会の理念は人々の中で受け継がれていったことを押さえたい。